岐阜県方言と愛知県方言の連続性

Continuity observed between Gifu-dialect (s) and Aichi-dialect (s)

山　田　敏　弘
YAMADA Toshihiro
lingua@gifu-u.ac.jp

1．はじめに

岐阜県方言は，東西方言の接点に位置し，主に，アクセントや母音「ウ」の非円唇性など，音韻面において東日本方言的（非西日本方言的）特徴を呈する反面，語彙・文法的には京都方言の影響を強く受けるハイブリッド方言である。一方，江戸期からは，天領となった飛騨一国と対照的に，美濃地方は一国としての統治がなされず，郡上藩や大垣藩など大きな領地をもった地域はあったにせよ，尾張の実質的支配下に置かれ，ことばの面でも強く影響を受けていった。

概略，以上のように語られる方言的特徴ではあるが，実際に，どのような語彙が尾張方言と共通し，どのように分布しているのか，また岐阜独自の方言は何か，岐阜県・愛知県両県全体を見渡すには，全国的な調査の部分を取り出して概観するほかはない。しかし，全国調査は，せいぜい各県60地点ほどでおこなわれたもので，かつ語彙が限的的である。また，岐阜県と愛知県の境界域を丹念に実地調査した太田・中川 (1983) などの研究もあるが，今度は県全域を見渡せない。900枚の地図を主に通信調査により描いた加藤編 (1994-98) は，岐阜県内の分布は概略見渡せるが，特定の語彙に限って分布を見るにはやや見にくさを否めない。岐阜県内の語彙分布を問われた際，即答できない理由はここにあった。

そこで，平成23年度から25年度まで 3 年間ならびに平成26年度から28年度まで 3 年間に付与された科学研究費補助金を用いて，岐阜県内ならびに愛知県内のすべての市町村史に記載された方言語彙をすべてデータベース化することにし，そこから両県で用いられる，特に俚言の連続性を明らかにしようと試みた。今回収集された語彙・文法項目は，岐阜県が55,384項目，愛知県が44,753項目である。実際には，類似の意味を含む名詞や代名詞などがひとまとまりに記載されている項目があり，この数字がすなわち語彙数ではないが，この10万語を超えるデータベースから，岐阜県と愛知県に特徴的に分布する形式をピックアップし，その地図化を試みた。なお，今回は，地図として，主に，本稿締切りに間に合ったア行ならびにカ行の223枚を対象に考察をおこなう。

2．地図作成ソフト

地図作成については，名古屋大学工学部電気電子・情報工学科在学中の山田智也氏開発によるRubyをベースにした画像化ソフトを使用した。

検索語句	プロット文字
あーぬく	◆
あゝぬく	◆
ああぬく	◆
あおぬく	●
あんぬく	■
あんぬき	■
あぬく	★
あ、ぬく	★
あぬきだま	☆
あっぱぬく	○
あっぱのけ	◎
あんぬきさんぱ	□

オプション	true=1, false=0
完全一致検索	0
平仮名・片仮名の区別	0
凡例を表示	1
出力ファイル名	aanuku.png

当該ソフトは，岐阜県と愛知県の異なる 2 つのエクセルデータから，該当する語形を検索し，その語形の情報として付記されている収録市町村史を呼び出し，その位置を地図上にプロットするというものである。検索語彙は，左図に示すようにエクセル上で自由に設定でき，それを地図上に表現する記号もUnicodeにある記号であれば任意に設定できるため，素人にも扱いや

すい。また，正規表現も使用できる。

より汎用性のあるインターフェイスの開発を，最初，C++を用いて試みたが，それによると使用できる文字が1bit文字に限定されることになるため，方言地図のようなさまざまな語形を示さなければならない場合には不都合である。結果，エクセルシートを用いての語彙指定方法を採った。なお，今回は，地図での見栄えを考えて，表示フォントとしてOsakaを使用したため，一部の機種保存文字は使用していないが，フォントを選択すれば，より多様な記号も使用できる。

また，本ソフトは，高価なillustratorなどの画像ソフトがなくとも，汎用性の高いエクセルファイルおよび無料のソフトウェア開発ソフトXcodeのみで作動するため，誰にでも扱える。また，語形の指定数次第であるが，おおよそ一枚の地図を書くのに１分から２分程度で描けるため，データさえ整っていれば短時間に多くの地図を示すことができるなど，さまざまな利点を有する。

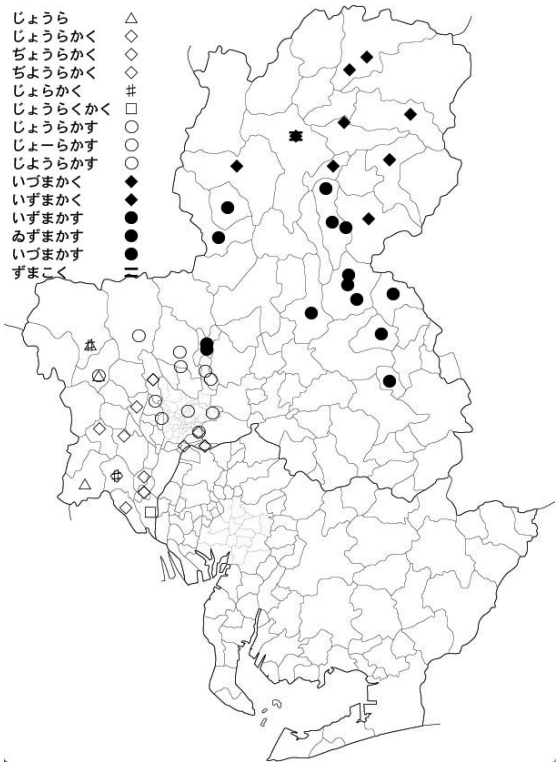
課題として，「きりぎりす」の意味の「ギッチョ」と「左利き」の意味の「ギッチョ」など，同音異義語の排除には一工夫が必要であるが，部分一致で探せば「ギッチョ」のほかに「ハタオリギッチョ」など後部要素として語形を含む場合も図示できる。なお，「じ」と「ぢ」，現代仮名遣いの長音表記と長音符は，当然のことながら異なる文字と認識されるため，「あじない」と「あぢない」，「ぎょうさん」と「ぎようさん」と「ぎょーさん」などと記述されている場合，別々に指定する必要がある。特に，愛知県尾張地方から岐阜県美濃地方中西部において見られる，連母音の融合現象については，「赤い」を例に取れば，「赤ぇあ」「あかぇー」「あきゃー」「あきゃあ」など多数の表記が存在し，それらがほぼ同じ音として表示されていると理解しつつも，別の文字列として指定しなければならない。そのため，地図の凡例（今回，凡例としては，漢字との交ぜ書きもあるためひらがなにて示すが，方言形として引用する場合にはカタカナで示す）にて，以上の形式がすべて示されることとなる。

以下，このソフトを使用して地図化したデータを用いつつ，岐阜県方言と愛知県方言の連続性を地図に示して解説を加えていく。

３．岐阜県に特徴的に分布する語彙

岐阜県は，江戸時代に飛騨地方と美濃地方がそれぞれ異なる支配を受けたが，それでも，言語的な統一性が見られる県である。今回は，その特徴を表す４枚の地図をもとに考察をおこなう。

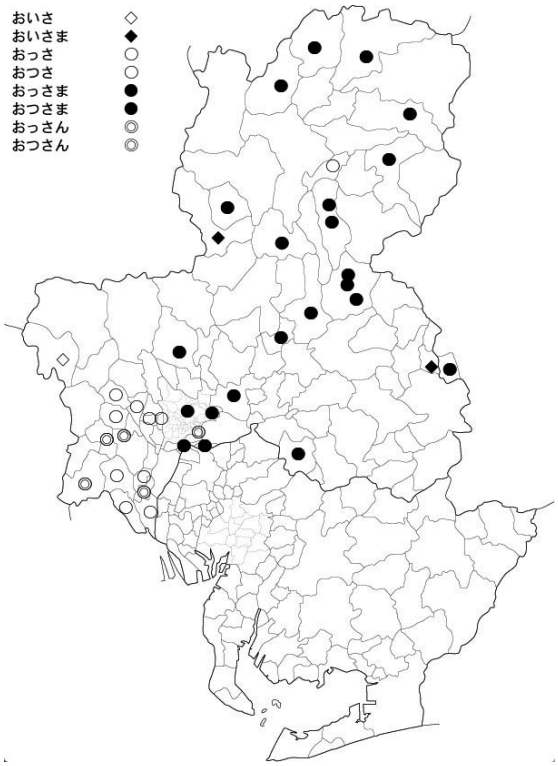
当然のことであるが，県境によって隣県とまったく異なる方言が用いられることのほうが珍しい。岐阜県では，「画鋲」の意味の「ガバリ」が用いられたり，小学校の教室内で使われる「一号車，二号車…（２列をまとめて単位とする呼び名）」など，比較的新しい時代に生じた，県単位の教育が関係する語をのぞき，愛知県との語彙の連続性が見られることが普通である。その中で，「あぐらをかく」の意味の「いずまかく」類は，今回収集した愛知県内の語彙集からは，一例も見つけられなかった。『日本方言大辞典』には，「イズマイ」や「イジマイ」が，三重県・奈良県に見られると報告があり，決して岐阜県独自の語とは言えないが，西日本との連続性も考えにくい分布が今回，見られた（地図１）。



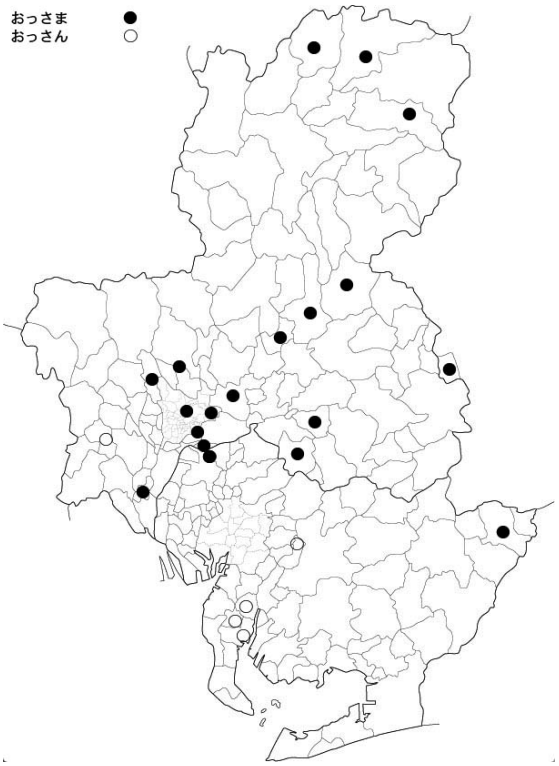
地図１　あぐら（をかく）

北部に見られる「イズマカク◆」は，「あぐら」からの連想で「かく」が用いられたものであろう。本来「居住まい」とは「居住まいを正す」の例にもあるとおり，「座っている様子」のことで，「あぐら」の意味はない。「あぐら」の意味が中心となった際に，「カク」という動詞とともに用いられるようになったのであろう。飛騨南部を中心に見られる「イズマカス●」は，他動詞接辞の「カス」が関係すると考えられる。一方，美濃地方では広く「ジョーラカス○」「ジョーラカク◇」が用いられており，およそ，「ジョーラカス○」は「イズマカス●」と連続して分布するなど，前部・後部が別々に連続と分断を示している。

続いて，「叔父」の意の語を見ておく。東濃地方にはわずかな分布しか確認されないが，飛騨から美濃地方岐阜市近郊まで，広く「オッサマ」が確認される。西濃地方では，語形が崩れ「オッサ」や「オッサン」へと変化しているが，大きな差ではないと考えられる。一方，愛知県には，見た限りで分布が確認できなかった。興味深いのは，「禅宗の僧侶」の意味の「オッサマ」と，かなりの部分で重なることである。下図は，左の地図 2 が「叔父」，右の地図 3 が「禅宗の僧侶」である。



地図 2　叔父



地図 3　禅宗の僧侶

2 語は，同音異義語となり混乱があるとも考えられるが，実際，我が家では「叔父」を「オッチャン」など親しさを表す接辞を付し，僧侶の「オッサマ」と区別して呼んでいたなど，各地で呼び分けがある場合も多い。「おじさま」と「おしょうさま」から，それぞれ独自に変化をした 2 語形は，場面で理解されながら併存しているものと考えられる。なお，西濃では浄土真宗の「ゴエンサマ」系が多く見られ，宗派による名称の差も県内の方言差となっている。

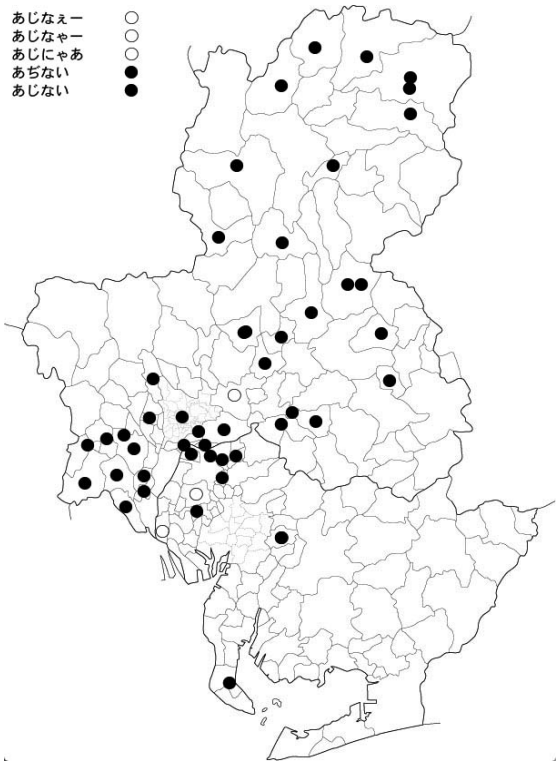
一方，これら 2 語が岐阜県内に特徴的に見られることに関し，その理由は定かでない。飛騨地方では，家長制度の下，次男以下の男子が成人しても家を出て行かない大家族制度があった地域もあるが，美濃地方で，その制度は限定的であり，安易に家族制度と結びつけることはできない。単に，語の音声的変化の結果，同音異義語になっただけであろう。

次に，「不味い」を意味する「アジナイ」類を見る（地図４）。北陸から近畿まで分布するこの語は，そのつながりから考えて岐阜県内に広く分布するが，一方で，愛知県には尾張北部など限定的に見られるに留まる。

その理由をこの地図から伺うことはできない。なぜならば，俚言が収集された方言集に，共通語と同じ形式である「マズイ」は採集されないためである。大西拓一郎編（2016：106）には，愛知県内で「マズイ」が「まずい」の意味で回答されていることがわかる。愛知県内では，この「マズイ」にブロックされて「アジナイ」類が，限定的にしか広がらなかったことが理解される。

方言集に共通語は，基本拾われない。今回示した地図は，このような共通語と同じ形式の多くを含まないという欠点をもつことも，述べ添えたい。

もう１枚，岐阜県に濃く分布する語を見ておく。それは，「におい」を表す「カザ」である。「カザ」は，鎌倉時代にはその使用が見られるが，意外と全国の分布は限られる。『日本言語地図』85図によると，北陸から近畿地方に見られるが，岐阜県と愛知県はその境界域にあり，岐阜は使用する県，愛知は使用しない県とはっきり分かれる。

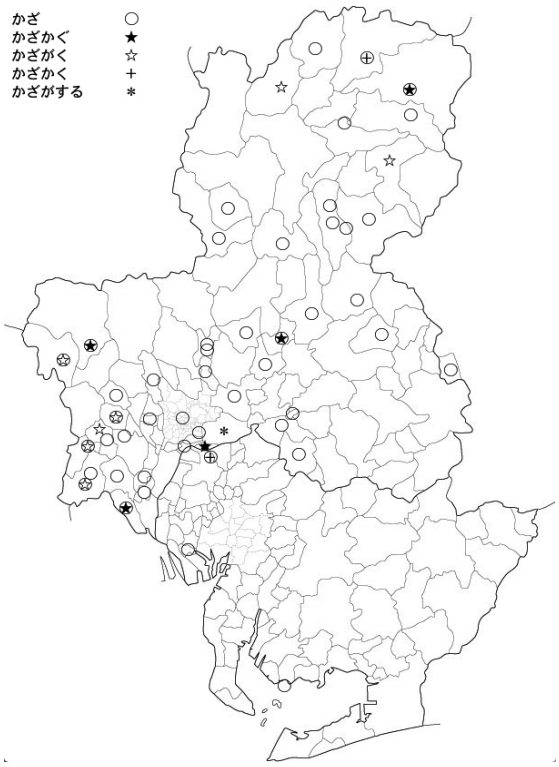


地図４　まずい

その様子は，今回得られた図でも確認される。愛知県内では，岐阜県と隣接する尾張北部に１地点と，旧海部郡，そして旧幡豆郡に記述が残っている。今回は記述が見られなかったが，『日本言語地図』85図では知多半島にも見られる。それらは，三重県から船によって伝えられたものと考えられる。

「においを嗅ぐ」全体で見ると，岐阜県内では，「嗅ぐ」に相当する部分が，西濃地方では「カザガク㊍」がややまとまっているが，全県的に見ると「カグ★」「ガク☆」「カク＋」がランダムに分布を呈する。「舌鼓」が「シタズツミ」となるが如く，各地で有声性の転移が生じたか。この「カザガク☆」は，飛騨地方から西濃地方，滋賀県を経て奈良県まで分布する（『日本言語地図』86図）。

岐阜県は，東西方言の接点にして，混沌の地でもある。



地図５　においを嗅ぐ

4．岐阜県美濃地方と愛知県尾張地方に連続した分布域をもつ語彙

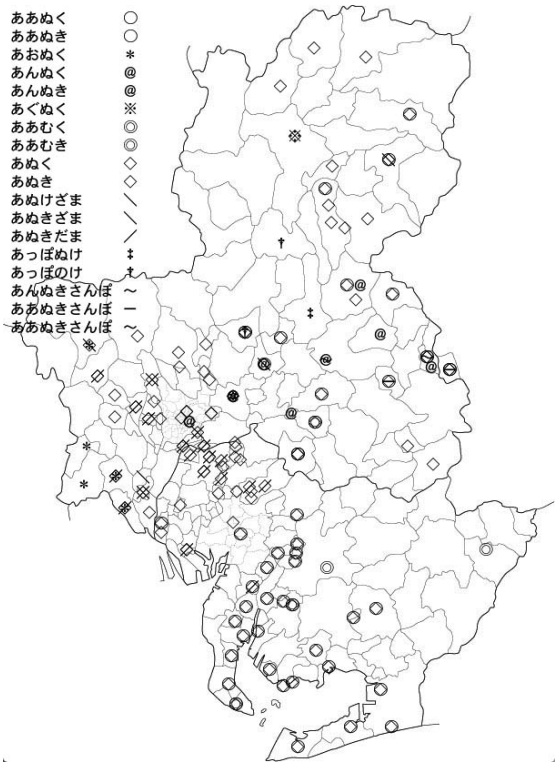
戦国時代，織田信長に占領されて以来，美濃国は尾張国の影響を強く受ける地域となった。しかし，その支配によって，すべてのことばが名古屋からもたらされたというわけではない。その証拠をいくつか拾い上げていく。

まず取り上げるのは「仰向く」を意味する「アーヌク」などの語形である（地図６）。

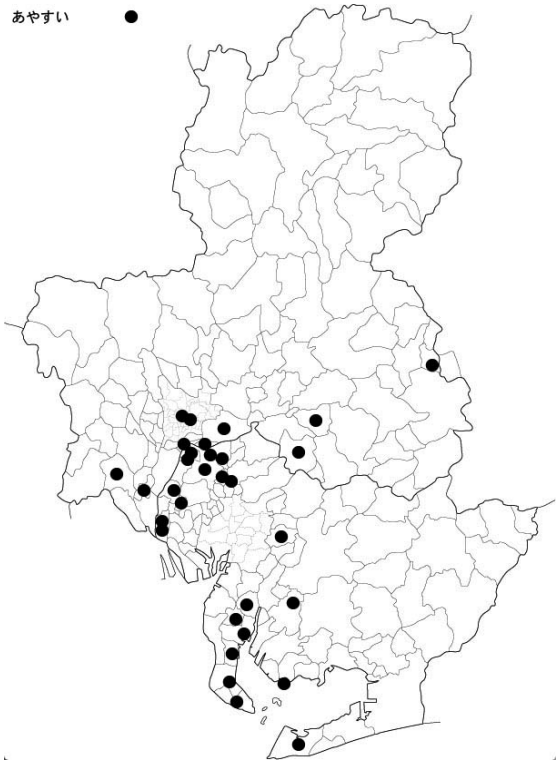
「仰向く」は，平安時代から例が見られることばで，「のけぞる」と同じ「のく」を含み，古くは「あおのく」であったと考えられている。その古形の残存が，当地には多く見られる。

左図の中で「アーヌク○」と「アヌク◇」を見てみると，岐阜県内には短い「アヌク◇」が飛騨地方まで広く分布し，反面，長い「アーヌク○」は，併用◎も合わせ，愛知県三河地方と岐阜県飛騨地方・東濃地方に観察されることがわかる。

語は，省力化の観点に照らせば，長い語形から短い語形に変化することは当然である。飛騨地方は，江戸時代にも名古屋の影響を直接には受けなかったことから，この語は，美濃国から飛騨国と尾張国へと伝えられたものと考えるのが妥当であると言える。



地図６　仰向く



地図７　容易な

ただ，こまかく見ていくとひとつだけ疑問が残る。西濃地方に「アオヌク＊」が一定数観察されることである。一般に，「アオヌク」が「アーヌク」のような語形に変化するのは，母音をより効率的に発音しようとする変化として理解される。このことより，「アオヌク＊」を分断するように「アヌク◇」が西から進入し，中山道ならびに美濃路に広がったと推察される。

その手がかりとして全国の分布を見たいところではあるが，この「仰向く」に関し，全国（あるいは一部地域で）一律に調査をおこなう地図による分布が，管見の限り見当たらなかった。本考察で採った手法は，過去の記述を基に，あらゆる語彙に関してその記述を地図化できる点でメリットがある。これまであまり調べられてこなかった「仰向く」のような語に関しても，おおよその分布がわかることはメリットと言えよう。このような作業が，さらに隣県に及べば，この「アオヌク」が「のく」の語源意識からより新しい時代に生じたものであるのか，あるいは，別の可能性による

ものなのかがはっきりしてくるであろう。ここでは，結論を保留してさらなるデータ収集ならびに調査をおこなっていきたい。

より，単純に，尾張地方と美濃地方に重点的に分布している語として，「簡単だ」との意味の「アヤスイ」を見ると，地図７のようになる。

「アヤスイ」は，方言としての記述が狭く，愛知県と滋賀県に見られると『日本方言大辞典』は記す。語源も不詳であるが，「たやすい」の語頭子音脱落である可能性が指摘できる。

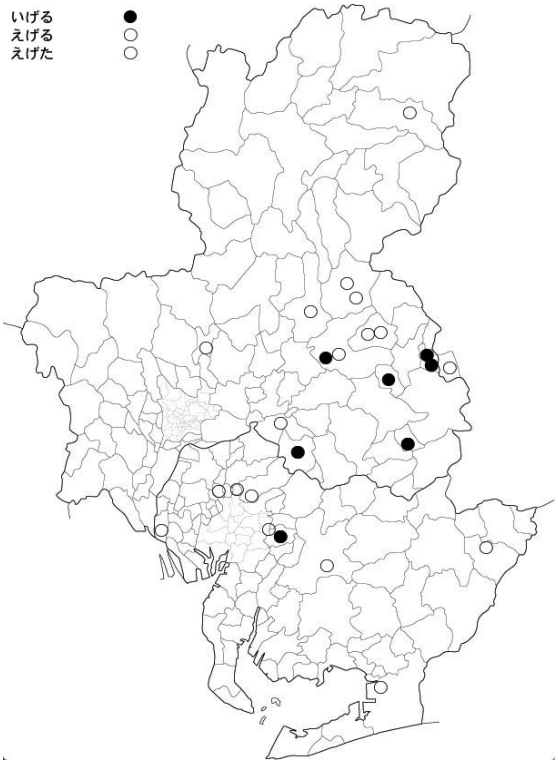
この語は，尾張地方と隣接する美濃地方南部に見られるが，美濃地方でも限定的な範囲にしか見られない。であれば，ふつうに考えて，尾張地方から広がった可能性が高い。江戸時代の『尾張方言』にも見られない，さらに新しい語形として尾張から美濃へと広がったのではないか。美濃と尾張は，江戸時代に語の流入方向が逆転した。岐阜は，その逆転の好例を示す地と考えられる。

５．岐阜県東濃地方と愛知県三河地方とに連続した分布域をもつ語彙

岐阜県東濃地方と愛知県三河地方は，鉄道によって直接的に結ばれてはいないが，国立国語研究所の大西プロジェクトにおける調査で，一段動詞のラ行五段化が，現在でもこの地域で進行中の現象であると考えられるなど，言語的には多くの類似点を見いだすことができる地域である（大西編2016：138参照）。

語彙的にも，この連続性が垣間見える地図がある。それが，地図８の「飽きる」に対する方言形の図である。この語は，岐阜県内で東濃地方に特徴的に分布し，愛知県内では尾張地方にも見られるが，三河地方にも広く分布が確認される語である（当地では，母音の「イ」が広母音化して「エ」となる現象が広く見られ，「イゲル・エゲル」も，明確な分布域を示すことなく，混在している）。

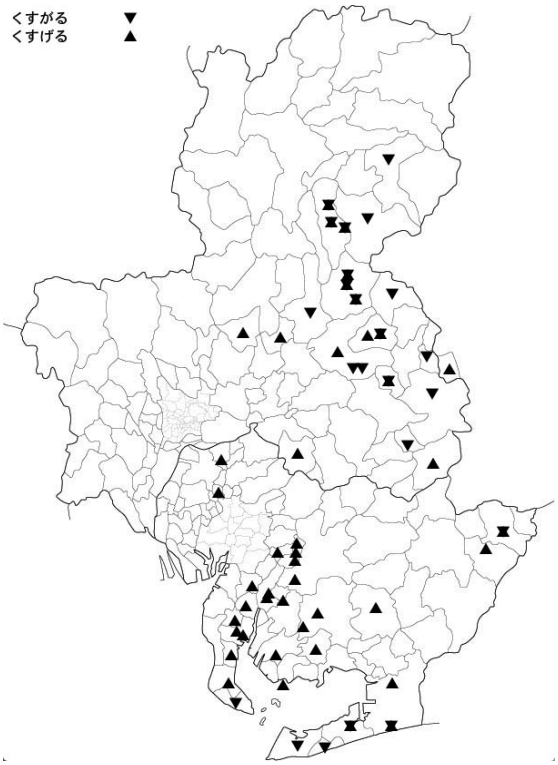
残念ながら，三河地方山間部は，人口が少なく，また記述された方言も多くない。特に，平成の大合併で豊田市に合併された旧西加茂郡・東加茂郡の山間部は，方言記述が少なく，したがって地図上も空白地帯にせざるをえなかった。この地帯の記述が揃っていたら，東濃地方と三河地方との連続性がよりはっきりと示せたに違いない。



地図８　飽きる

無いものは無いと諦めた上で，もう一枚，地図を見ておく。今度は，「刺さる」と「刺す」の自動詞・他動詞ペアである（地図９）。「刺さる」に相当する「クスガル▼」と「刺す」に対応する「クスゲル▲」は，必ずしもペアで記述されるわけではない。総じて愛知県内では，「クスゲル▲」が圧倒的に多く，渥美半島に固まって「クスガル▼」が記述されているのみである。方言集は，近隣地域で互いに参照し合う傾向があり，同じ地域に似たような記述が見られることがある。同様なことは，旧恵那郡から旧益田郡，現在の中津川市から下呂市にかけても見られる。こちらは，自動詞の「クスガル▼」が多い。いずれの地域も，対応する自動詞ならびに他動詞が記述されておらず，確かなことは言えないが，それぞれ「ササル」「サス」という共通語形が対応語形として使用されるとも考えにくいことから，記述が包括的におこなわれていないためと考えてよいであろう。方言集からの語彙収集

は，あくまで記述されたものの集積である。調査者が意図して収集できない点は弱点であると言わざるを得ない。せめて，自動詞があれば他動詞があると，文法的素養をもった人が記述に関わっていればと思うこともないとは言えないが，すでに失われた過去の遺産は，それだけで十分な価値がある。分かるところが示されればそれでよしとしたい。



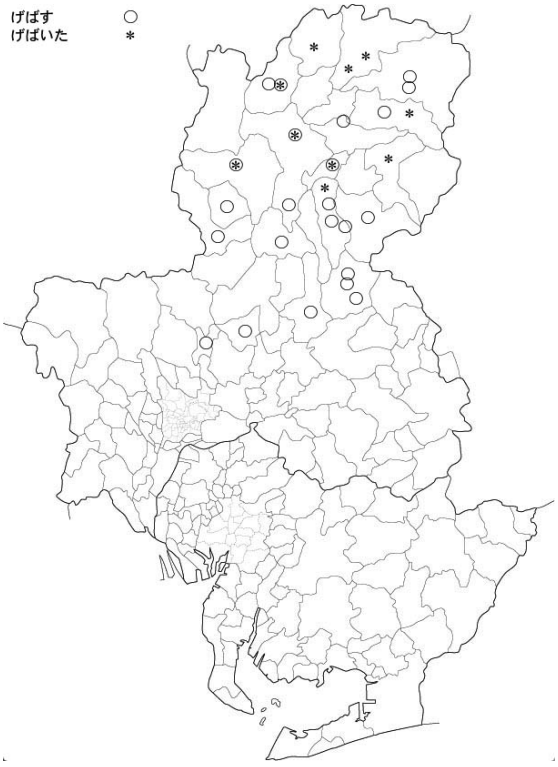
地図９　刺さる・刺す

６．飛騨地方に限定された語彙

飛騨地方は，白山および北アルプスによって東西が冬期，ほとんど閉ざされており，わずかに富山県と数本の道によってつながるのみである。語彙的にもどん詰まりの様相を呈し，「かたつむり」の方言名として「ナメクジ」系の語が見られるなど，古語も多く残り，独特な語彙を有する。

今回，飛騨地方独特の語彙は多数見られたが，その中から代表的な飛騨のことばを２語のみ紹介する。

最初は，「失敗する」の意味の「ゲバス○」と，その過去形の「ゲバイタ＊」である。語源不明のこの語は，飛騨地方で現在でも若者に使われている飛騨を代表する語である（語源については，別稿山田（2017近刊ａ）にて小考を著したので，そちらを参照されたい)。実際には詠嘆表現として「失敗した～」「しまった！」の意で「ゲバイタ」も多用されるが，資料からは，旧大野郡・旧吉城郡地域に「げばいた」はほぼ限定される分布が得られた（萩原町北部の旧川西村も旧大野郡である)。一方，「ゲバス」は美濃地方にも一定の使用域をもつほど広く分布している。活用形の中から特定場面で慣用的に用いられる語が独立して記述されるのは，よくあることである。



地図10　失敗する・失敗した

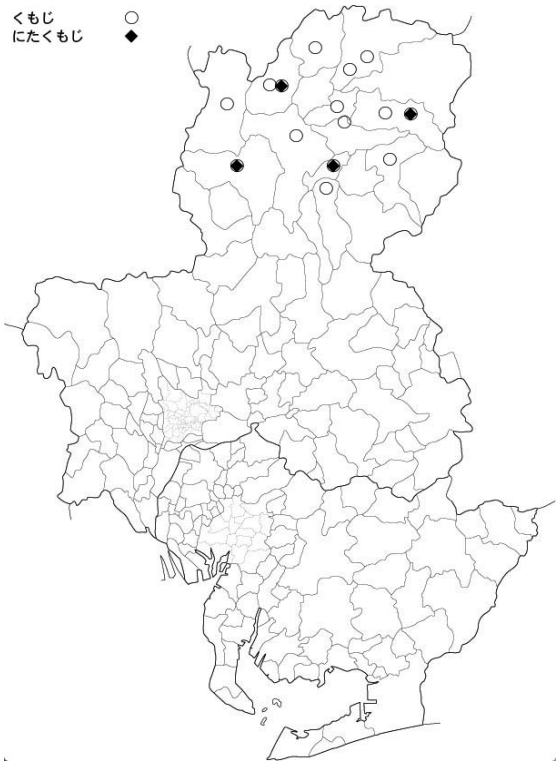
もう一語，飛騨独自のことばを見ておく。それは，京都の女房詞に由来すると考えられる「文字ことば」の「クモジ」，すなわち「茎漬け」である（地図11)。

よく飛騨のことばは，京都のことばと似ていると言われ，その起源を「飛騨の匠」の求める言及も見られる。感謝の意味の「オオキニ」しかり，敬語の「～ハル」しかりである。しかし，租庸調の時代に，これらの語が存在していたとは考えられず，飛騨のことばが，飛騨の匠によって直接，持ち帰られたものというよりは，やはりどこかを

伝って地続きに運ばれたか，あるいは，独自に変化したと考えるのが妥当である。

この「クモジ」は前者で，北陸地方から伝わった可能性が高い。なぜなら，富山，石川，福井に「オクモジ」の語が記述され，飛騨でも，特に北部にその分布が偏っているからである。

なお，「ニタクモジ◆」は，その「茎漬け」を煮たもので，飛騨の新たな食の名物となろうとしている伝統食である。



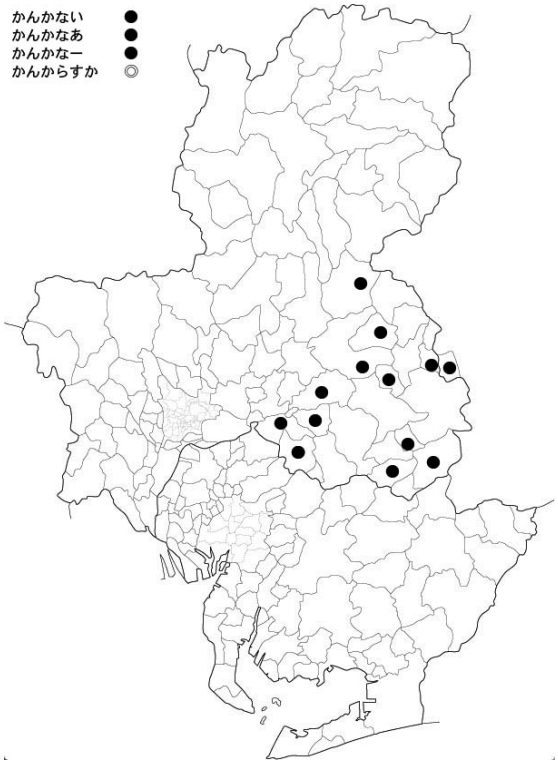
地図11　茎漬け

７．東濃地方に限定された語彙

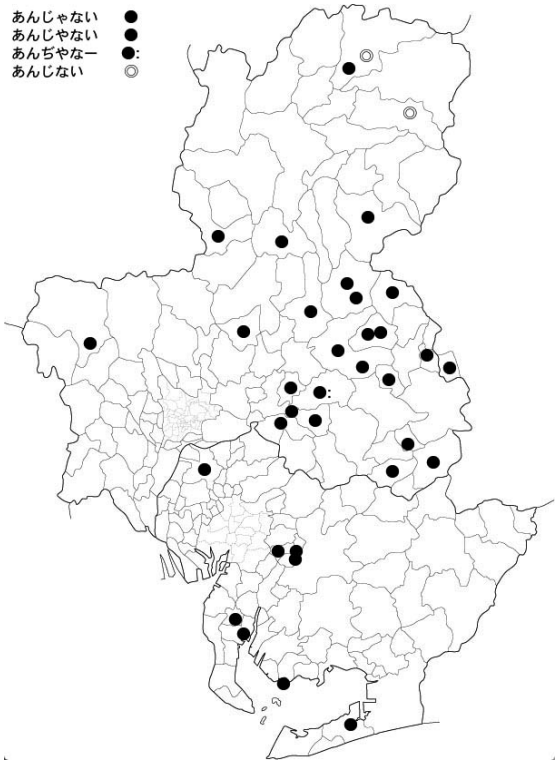
飛騨地方ほどではないが，東濃地方にも地域限定の語が見られる。

「カンカナイ」は，「勘考ない」で「工夫しようがない」というところから「しかたがない」の意味となったもの。一方の「アンジャナイ」は，「案じることはない」との意味で，「大丈夫」という意味である。いずれも，現在もよく聞かれる。

前者の「カンカナイ」は，他県に分布が見られないが，後者は群馬県から兵庫県まで広く見られ愛知県にも記述がある。一方，「アンジャナイ」も東濃地方では，独自のことばと考えられている。その理由は，愛知県で記述はあれどもすでに廃れたところが多く，結果として聞かれる地域が東濃地方に限定されたからであると考えられる。今回の地



地図12　しかたがない

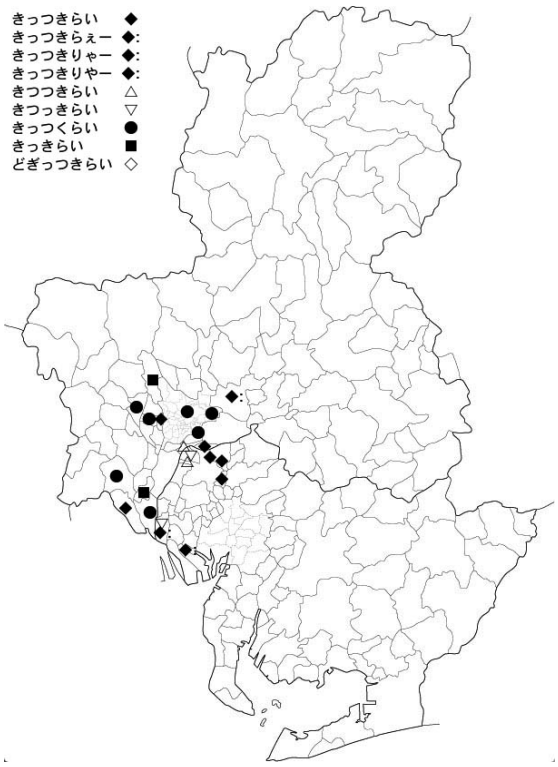


地図13　大丈夫

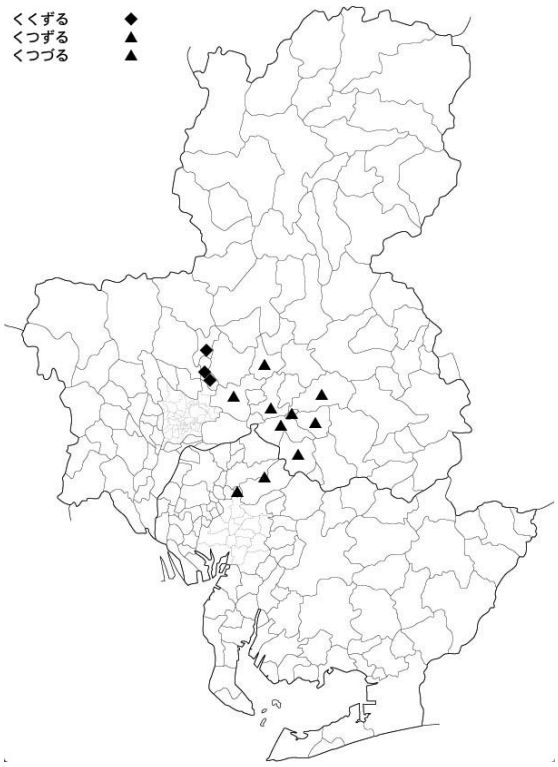
図は，明治時代のものから平成のものまで，荒っぽく言えば100年間の記述の蓄積をデータとしている。そのため，厳密な意味で，同時期の方言分布もその変化も，示すことができない。その点は率直に弱点と認めたい。共時的分布を示すことが可能であれば，その分布域は変わってくることが予想される。しかし，何もやらないで批判ばかりするよりも，この地図を基礎とし新しい調査がおこなわれることを期待したい。

8．その他の地域限定語彙

きわめて狭い地域に分布が確認される語を，最後に2語示しておく。



地図14　大嫌い



地図15　熱中する

地図14に示した，岐阜市以西に分布する「大嫌い」の意味の「キッツキライ」類は，「きつく嫌い」を語源とする。現代の若者が日常的に用いる語ではないが，筆者が子どもの頃の昭和50年代には頻繁に用いられていた。「キッツクライ」は，語源意識が薄れた比較的新しい語形と考えられるが，岐阜市だけでなく養老や海津でも用いられている。周辺部に古形を残しながらも，西から新しいことばが入ったとも考えられるが，他県に分布が確認されないところから，やはり県内独自に発展していった語であろう。一方，地図15の「熱中する」のほうは，愛知県にわずかに確認されるが，ほぼ岐阜県語である。しかも，中濃地方でしか用いられない。いずれも，岐阜県に限定される語であり，岐阜県内には，地域独自の語形を生み出す力があることが確認された。このようなことばは，少なからず存在する。

今回，このような地域限定のことばの分布を示すことができたことは，この研究独自の大きな成果である。地域限定のことばの分布は，全国調査によって分布が確かめられることはない。すでに記述されたデータをうまく使えば，大規模な調査をおこなわなくとも，おおまかな分布がわかることも十分に証明できたのではないか。

９．おわりに

岐阜県方言との連続性において，愛知県方言の分布も合わせて考察してきた。本考察では，岐阜県方言が愛知県方言と十分な共通性を持ちつつも，独自の方言として特色を有するということを十分に示せたと考える。

現地調査による全国調査は，精密な同時代地図が描けるが時間と費用がかかる。また，加藤編(1994-98) のように，通信調査を取り入れても，回答の精粗もあり課題が残る。それぞれの価値を認めた上で，大まかな分布を示すだけならば，本考察に示したような，過去に積み上げられた記述を用いて分布を示す方法もあってよい。費用はそれほど掛けずに，大量の語彙に関してさまざまに分布が示せるからである。どちらかだけというよりも，補完的にこのような手法を用いれば，特に，地域限定の語彙には有効である。

今回，限られた紙面で示せたのはわずかに15枚である。実際には基となった800枚程度の地図がある。それらは，山田（2017　近刊b）に収めたので，そちらをご覧いただき，さらに分布を確かめられたい。なお，今回の科研費の主眼が，岐阜県方言を主体に置いた愛知県方言との連続性の研究であったため，愛知県に特徴的に分布する語彙については，地図化して示すことが十分にできなかったことは断っておかなければならない。本研究は，あくまで岐阜県方言の研究である。ただ，愛知県方言に関しても十分なデータはあるから，必要であれば出力して便宜を供したい。また，飛騨と西濃山間部とをつなぐ福井県大野地方のデータベース構築は，残念ながら整備途中となった。今後の課題としたい。

【付記】

本研究は，日本学術振興会科学研究費基盤研究 (C)「愛知県・福井県の方言データベース構築および岐阜県方言との関連における総合的研究」（課題番号26370532，代表：山田敏弘）の研究成果の一部である。

【参考文献】（本文中に引用した方言資料は除く）

太田有多子・中川玲子編『尾張と中濃の境界地域言語地図』椙山女学園大学文学部国文科
大西拓一郎編 (2016)『新日本言語地図～分布図で見渡す方言の世界～』朝倉書店
加藤毅編 (1994-98)『日本のまん真ん中　岐阜県方言地図』岐阜県方言研究会
国立国語研究所編 (1967)『日本言語地図』第２集
山田敏弘 (2017近刊ａ)「飛騨方言の語源に関する小考」『斐太記』16，飛騨学の会
山田敏弘 (2017近刊ｂ)『岐阜・愛知の方言地図』科研費報告書